

地域のきずななき塔に

映画「谷中暮色」監督に聞く

幸田露伴の小説「五重塔」のモデルにもなった台東区谷中の天王寺の塔が焼失して50年あまり。炎上時の貴重な映像をはじめ、関東大震災や東京大空襲に激動にさらされた塔に今も強い敬愛を寄せる住民らの証言を交えたテレビドキュメンタリーという手法で、日本の地域社会の姿を失われた価値観を問う映画「谷中暮色」が11日夕、地元谷中コミュニティセンターで上映される。

(鈴木潔子)



桜の名所でもある谷中霊園に残る五重塔の礎石（後方）と船橋さん＝台東区谷中

11日夕、地元で上映

天王寺の五重塔は、かつて戸の四塔とされ、露伴や北池上の本門寺、上野の寛永、原白秋など多くの文人・歌人寺、浅草の浅草寺と並び「二江」の創作意欲をかき立てたが、

1957年7月6日未明、放火による火災で姿を消してしまっただ。脚本・監督は、米アリソンの大自然を舞台に、主演のオダギリジョーさんが全編英語で演じ、その作品性がベルリン映画祭で話題になった「ビッグ・リバー」(06年)の船橋淳さん(34)。「谷中暮色」も、前作の「ビッグ・リバー」に続き、今年のベルリン映画祭で上映された。9・11の同時多発テロを挟んで約10年、ニューヨークで生活した船橋さんが帰国後、居を構えたのが、「東京をいう喋るのたまたまにありながら、異空間のような静けさの漂う」谷中だった。

だ。

今も、百近い寺社が肩を寄せ合う昔ながらの街のたたずまいは「縄文時代には二つの小さな半島だった本郷と上野の台地の切っ先に祭られた聖なるほころの名残」。そんな神聖さをたたえた谷中で暮らすうち、50年も前に焼けてなくなった五重塔を、「今も地域社会のよりどころ」とし、再建をめざす人たちの心の中を知りたいと思うようになったのが、制作のきっかけだ。「とうの昔に消え去ったものに価値を見いだすとは一体、どんなことなのか。描いた精神性があった時点を描くことで、隣近所付き合いといった地域の連帯が失われ

世代間の断絶や格差も深まりつつある今の日本とを対比させたかった」と船橋さん。作品には、79歳の郷土史家をはじめ、地元住民らが往時の谷中の証言者として登場。彼らの協力のもと、取材を続けるうちに、炎上する五重塔を当時、消火にあたった消防団の副団長がカラーの8mmフィルムで撮影していた

たことを知り、そのときの映像も取られている。上映会は、11日午後6時半から、台東区谷中5の6の5の谷中コミュニティセンター大広間で。入場は無料だが、先着100人まで。問い合わせはビッグリバー・フィルム(03・3800211344)のinfo@film-choices.com。

倒産315社、22%増

08年度 負債総額8.8兆円

08年度に都内で1千万円以上の負債を抱えて倒産した企業は315社(前年度比22%増)で、負債総額は8兆8817億円(同341%増)だったことが7日、民間信用調査会社の東京商工リサーチの調べで分かった。倒産件数は5年ぶりに3千社を超え、負債総額は記録が残る09年度以降で2番目に高かった。

負債総額は、リーマン・ブラザーズのグループ4社の倒産関連で4・7兆円を占めた。販売不振を理由に倒産する中堅企業も多かった。同社は「倒産は増え、国や都の中小企業支援策が現状では機能していない。今後中小零細の下請け企業の連鎖倒産が続くだろう」としている。

未利用4割「保護者

携帯電話の有害サイトへの接続を制限する「フィルタリング」について、トナボウ